

童

2016年7月1日。

大地の入り口のお花畑に植えたヒマワリが、あっという間に子どもたちの背丈を超えました。日照りが続き、心配したのですが、子どもたちの水くれと朝夕の声掛けのおかげで、すくすくと伸びています。このヒマワリの種は、雄飛君と一緒に、裸足になり、口に含み、太陽に照らして植えたものだけに、更なる成長が楽しみです。

また、同じく植えた子どもたちのジャガイモも、子どもたちの手入れとスタッフたちの懸命な草取りのおかげで、いよいよ収穫が近づいてきましたし、大きく耕作面積を増やした大豆畑も、よきによきと芽が出て、こちらも、今年の味噌や豆腐作りに期待が持てそうです。

更に、本格的無農薬栽培に取り組んでいる、春菊、ニンジン、ズッキーニ、サツマイモ、メロン、トマト、綿花、黒豆なども、毎朝の手入れと声掛け、草取りなどのお世話のせいで、順調に育っています。

こんなおかげで、季節の移り変わり、植物の成長に合わせた季節の変化、そして、子どもたちとの定期的な畑への散歩などを通じて、時の流れを楽しんで味わって過ごせる毎日です。

天神さんコース、田んぼコース、畑コース、お墓コース、これらが大地の代表的な散歩コースです。これからの季節、やはり、天神さんコースが人気が高くなってきますが、今年は、収穫を楽しみに、畑コースもにぎわうことでしょう。そして、期待と大盛況の流しそうめんも、畑でとれた野菜や果樹、そして、青ちゃん得意の天ぷら材料になり、一層盛り上がることを期待しています。



【岐路に立つ】

「定年したらリンゴでも作るか」飯綱町の基幹産業であるリンゴ栽培。主力が 70、80代の中で、定年を迎える私の世代では、定年後にも仕事と収入があるリンゴ栽培を視野に、冒頭のような言葉をつぶやく人が多い。数ある果樹の中で、リンゴは、ほぼ通年（冬場の2か月間位を除き）作業があり、収入もそこそこあるので、定年後の張り合いと仕事と経済的な楽しさと、更に先祖から受け継いだ農地を荒らすことなく守れるというメリットもある。その裏返しに、最も手間暇と根気が必要となる果樹であり、減農薬有機栽培といっても、農薬散布も他の果樹に比べたら、回数が多いのが現状である。

さて、長寿リンゴとして栽培している両親も、今年 89 歳と 84 歳を迎える。町内でも、現役で夫婦そろって働く高齢夫婦としても有名になってきている。が、畑と一緒に作業をしていると、座って休む姿が、どんどん多くなってきている。こちらから引退を進めることは、ボケ防止のために避けてきており、自分で限界を感じてどうするかを待ってきたが、「今年いっぱいか」長男に「リンゴ栽培はどうか」などと言うことが多くなってきている。

私たちも、飯綱町のパワースポット（勝手にそう思い込んでいるうぬぼれであるが）にあるサンクゼール大地の丘の中心にあるリンゴ園をどう引き継ぐかずっと思索してきた。長年リンゴ栽培にJAの指導の下で取り組んできた両親の価値観に、無農薬栽培への道を進めることや安心安全な取り組みを提言することは、無謀なことであり、引退の節目をずっと待ち続けてきた。リンゴ園として残すには、無農薬リンゴ栽培畑としてこの丘に位置づけることがふさわしいと考えてきた。自分がやるのだったら、この道しかないと考えてきたが、両親が毎年今年も頑張って元気にやってきたという姿を年末に見るにつけ、真剣に取り組む覚悟を先送りしてきた。

が、今年はきっちりと決意する年、「岐路に立つ」

こう覚悟すると、不思議なことに、無農薬リンゴ栽培を目指して頑張っているグループや人に出会い、勉強会やセミナーに誘われ、いろいろ話す機会を頂く。「リンゴは病気知らず」「これだけ健康価値のある果樹を人々のために無農薬で栽培することは素晴らしいこと」「撤退産業であるリンゴ栽培は、ビジネスチャンス」「長野県の果樹をオーガニックにすることが日本、世界を牽引していく」など、熱い議論が続いていく

この性格だから、即断即決で、「それで行こう」と意気込み、無農薬農業に取り組んでいる長男に相談、きっと「いいねー」と応援してくれると思いきや・・・それが一枚上手だった！！

「リンゴにこだわることないんじゃない」「わざわざ農薬のかかるものを食べなくてもいいし、つまりりんごを食べなくてもいいし」「無農薬を目指して時間労力エネルギーをそれにつぎ込む人生を選ぶか、自分の人生で本当にやりたいことにエネルギーを注ぐのか」「農薬の必要としない、栗や柿や梅などに転換したり、それらを含めた林や森を作ったほうが、後世のためだったり、子どもたちのためだったりするかも」・・・

子どもたちと過ごす毎日、これが楽しくて30年近くそれを中心に過ごしてきた人生。好き勝手にやっているのに、定年もない人生（そろそろ青ちゃん、動けなくなってきたから、引退してほしいという勧告もないと思っている）。

無農薬リンゴ栽培が完成するまでは、基本まで5年、そして、収入安定まで10年と言われている（現在時点）。もし、リンゴ栽培および田んぼの無農薬栽培をすとなったら、それにほとんどのエネルギーをかけなければならないだろう。

農業、農家の渦の中にいると、祖先からの受け継いできている土地を荒らさないで維持していくこと、守っていくこと、飯綱町のリンゴを守っていくことなどのプレッシャーにさらされる。おいしいといってリンゴを食べてくれる姿を見ながらも、消毒せざるを得ない自分たちとの葛藤。開園当時、園舎の周りがあったリンゴや桃を、その葛藤と両親との話し合い（と言っても、一方的な決断だったが）の中で、伐採して森に変換してきた歴史があり、果樹面積は、半分になった。周囲の果樹農家とも15年位かかり、ようやく気持ちよく理解してくださり、農薬散布も、時間や回数も考えてくれるようになった。

リンゴの収入などで育ててもらった自分。人生の張り合いとして今も頑張っている両親。介護も必要とせず、自立して生きている両親のおかげで、夫婦で好きなことをしたり、家族全員でインドにも長期で行ける人生。全ての根源は両親の健康、その健康の源は、毎日働くことがある農業、いきがいを感ずる日々の暮らし、その源はリンゴ園。

掘り進めれば、大地の子どもたちと日々、好き勝手にエネルギーを注いで過ごせる人生のキーワードは、両親そして、その奥の農業「リンゴ」 たかがリンゴ園であるが、大地の丘のリンゴ園は、人生のキーワードとなっている。

全ては、自分たち夫婦がどう生きていくか、更なる自分たちの夢は何か、自分たちが社会のために更に何ができるかが問われていることは、百も承知せざるを得ない。

さて、この秋は、リンゴをどう味わうか、そして、この冬のリンゴの剪定ははどのようにするか。まさに岐路に立つ！！